

社 報



元請と名義人

新入社員の募集

高校卒業者を対象に、型枠技能職を募集しています。決して待遇は良くありませんが、手に職をつけたい若者は是非とも応募をいただければと思います。

過去の採用状況は

2005年 4人	} 19人
2006年 3人	
2007年 1人	
2008年 5人	
2009年 6人	

2010年 2011年は採用停止
このうち現職者は2人です。
若者を育てなければ、会社の将来性が失われてしまいます。



学卒者を募集中

建設元請会社(ゼネコン)は施工の下部組織として、下請専門企業を組織し、協力会(名義人会)を作っています。清水建設は「兼喜会」という名義人会を持ち、当社も兼喜会に所属し、役員も努めています。

竹中工務店は「竹和会」、大林組は「林友会」、など元請各社はそれぞれに会を作っています。

元請は名義人会を組織し、その会員に優先的に工事を発注します。その理由は、建設業の工事量の波を名義人が調整し、職方を集めたり、離したりする機能を名義人に持たせたからだと思います。

製造業でも好不況があり、人員調整は一大事であり新聞ネタとなるほです。

名義人は元請の工事量に合わせて人員調整を行う役目を負い、工事量が増えれば人を集め、工事量が減れば人を切り離し、労務管理という大変しんどい役どころをこなすことで、評価も待遇も良かったのです。

事実、工事量が多かった昭和30・40年代には重要な存在でした。

しかし、第2次大戦の戦後復興も落ち着き、高度経済成長も終わると、建設工事の量が減少に転じ、建設価格も下がり、名義人はその役目を終えたかのようになったのです。

バブル景気という異常な好景気が一時的にあったものの、昭和50年代からずっと人は余り気味でした。一時的な需給変動や季節要因で人手が足りなくなることがあっても、基本基調は右肩下がりでした。

職方の労務不足懸念がなくなると、名義人の存在価値は低くなります。人が余っているのに、建設価格は下がっても人不足にはならず、ダンピングをしても工事を消化できるようになり、その結果がさらにダンピングを生むという悪循環に陥ったわけです。

淘汰につぐ淘汰の状態、下請工事会社や職方は疲弊し、存続の意欲さえ失いつつあります。

昭和30年代に入職した職方は引退を迎え、昭和40年代の入職者も引退時期です。昭和50年代以降は建設入職者が激減しています。

(続く)

当社ホームページは <http://www.forbuild.co.jp> ご覧になれます。

熱中症で気分が悪く……

8月22日(月) 10:15頃 晴れ
新井クリニックの現場にて、元請の監督さんが現場を巡回中、めまいがしたと言い、ヘルメットを脱いで、型枠材に腰掛けている被災者を発見。声を掛けて病院へ行くように指導を受け、熱中症と診断された。
所属:竹島部-近藤工務店
職種:型枠会社事業主

傷病:熱中症
休業:なし
本人に話を聞くと、お盆休みで長めの休みをとり、休み明けの初日であったことが関係しているかも、とのことでした。
休暇明けなど、体が熱さに慣れていない時には、熱中症になりやすいようです。特に気をつけましょう!

2011年 安全成績

■現場災害 H23.1.1-H23.8.31	
休業災害	----- 2
不休災害	----- 2
物損災害	----- 0
その他	----- 0
合計	----- 4
■交通災害 H23.1.1-H23.8.31	
人身災害	----- 0
物損災害	----- 1
合計	----- 1